

「顔」の意味拡張に対する認知的考察

有蘭智美

キーワード 身体部位詞、顔、慣用表現、意味拡張、認知プロセス

1. はじめに

「顔」は、身体部位としての概念だけでなく、その概念から派生した種々の概念を表す。本稿では、「顔」を構成要素に持つ表現の表す概念に注目し、その成立過程を明らかにしていく。

本稿での考察対象は「顔」を構成要素に持つ慣用表現であり、「慣用表現」という語を、田中・ケキゼ（2005:103）に従い、「いわゆる成句・慣用句とそうでないものとを区別することなく、慣習化の進んだ自然な表現」という緩やかな定義で用いる。慣用表現は、個々の構成要素からは慣用的意味を予測できない、分析不可能なものとされてきたが、慣用表現によっては、個々の構成要素から意味が導けるか否かに関して断定し難く、明確には区別できない表現も含まれている。¹ 従って、いわゆる「成句」と呼ばれるものだけでなく、慣習化が進んでいると思われる一般的な語連結も考察対象とし、語レベルの意味拡張と句レベルの意味拡張の両者を同時に扱うことで、より包括的な意味分析を行うことが可能になる。

身体部位詞が表す種々の概念とその成立過程に関する研究は、日本語を対象とするものに限らずこれまでに多くなされてきたが（秋元 1994、有蘭 2006、田中 2001、2002、橋本1999、松本2000、2004、Kövecses and Radden 1998、Kövecses and Szabó 1996、Ning 2003など）、管見の限りでは「目」、「口」、「手」などと比べて「顔」に関する研究は少ない。しかし、顔は人間にとって主要な感覚器官が集まる場所であり、また、それらの感覚器官の全体的配置（＜容貌＞）や、感情（の変化）を表す＜表情＞は、他者を認識する際に重要なポイントになる。² この点で、我々にとって顔は、身体において際立ちを持っている。

田中・ケキゼ（2005）の認知的考察では、日本語の「顔」とロシア語の《Л И Ц О》（「顔」）の対照研究をすることによって、それらが表す種々の概念の

共通点と相違点に対し、社会的・文化的観点からの動機付けを提示している点で大変興味深い。しかし、相違する概念（日本語の〈立場〉・〈名誉〉と、ロシア語の〈個人的人格〉）については詳しい分析がなされているが、それ以外の〈顔〉から派生した概念については、そのほとんどが用例の羅列にとどまっており、それぞれの意味拡張に実際にどのような認知プロセスが関わっているかについては詳述されていない。またこれに関連して、身体部位としての〈顔〉からそれぞれの概念が派生している以上、概念同士に何らかの関連性が認められる可能性があるが、もしあるとすればどのように関連しているのか、ということについても述べられていない。従って、本稿では〈顔〉の意味拡張に関わる認知プロセスについて詳細に分析することで、「顔」という語（と、それを含む句）の意味が我々の認識を反映しているということを明らかにし、「顔」が表す概念の列挙にとどまらず、それらの概念間の関係についても明らかにしていく。³

2. 〈顔〉の意味拡張

2.1 身体部位としての〈顔〉

身体部位としての〈顔〉は以下の四つの観点から特徴付けられる。⁴

- (1) a. 構造： 目、口、鼻、耳などの部位が配置されている
- b. 機能： 内的心情を（顔面の筋肉運動によって）外部へ表出する
- c. 位置： 身体の前方向を向いた一部（更により狭く、首から上の前部）である
- d. 形状： 平面的広がりを持つ

身体部位の〈顔〉は、これらの四つの側面を備えており、例えば「顔が悪い」の「顔」は、目、口、鼻の配置によってその美醜を問われる対象（〈容貌〉）であり、この場合は上記の四つのうちの構造的側面に焦点が当てられている。また「顔が大きい人は、短髪の方が似合う」のような表現では、「顔」の平面的広がりが通常よりも大きいことを表し、この場合の「顔」では特に、その形状の側面に焦点が当てられている。

これら四つの側面を備えた〈顔〉は、それぞれの側面、あるいはいくつかの側面に基づいて意味が拡張している。なお、本稿での意味拡張に関わる三つの認知プロセスは、初山・深田（2003：76-88）の以下の定義に従う。

- (2) メタファー： 二つの事物・概念の何らかの類似性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩
- メトニミー： 二つの事物の外界における隣接性、あるいは二つの事物・概念の思考内、概念上の関連性に基づいて、一方の事物・概念を表す形式を用いて、他方の事物・概念を表すという比喩
- シネクドキー： より一般的な意味を持つ形式を用いて、より特殊な意味を表す、あるいは逆により特殊な意味を持つ形式を用いて、より一般的な意味を表す比喩

2. 2 構造的側面に基づく意味拡張

2. 2. 1 <化粧>

「顔」は、その構造的側面として、目、鼻、口、耳が配置されている。「顔」は、これらの部位やそれによって構成された顔全体に施す<化粧>を表す。

- (3) 歌舞伎はプロのメイクがやってくれるわけじゃなく自分で顔を拵えるわけで、顔のできは1. 化粧の技術、2. 美的センス、3. 役柄に対する解釈が問われるんだそう。
(<http://plaza.rakuten.co.jp/nekonami/diary/20060308/>)
- (4) 彼女はトイレで顔を直した。

(3)の「顔を拵える」は古典芸能の世界で用いられる句で、「顔」が<顔(の構造)>を、「拵える」が<手を加えて作り上げる>ことを表し、句全体で<顔に手を加えて作り上げる>(=<化粧する>)ことを意味しており、「顔」自体が<化粧>を表しているのではない。しかし、同文の「顔のでき」では、「顔」が<化粧>を、「でき」が<仕上がり具合>を表しており、「顔」自体に<化粧>の意味が認められる。また、「今日の顔、いつもと違うね」という発話や(4)の「顔を直す」の「顔」は「化粧」と言い換えることができ、「顔」自体に<化粧>の意味が認められる。これらの例では、<顔>の構造的側面を基に意味が拡張している。つまり、目、鼻、口などの部位やそれによって構成された顔全体に施す<化粧>は、その<顔>と空間において隣接しているため、メトニミーによって、<顔>を表す形式で<化粧>の意味を表しているのである。

2. 2. 2 <個性>

また、顔の構造（目、鼻、口など顔の部位の形状とその配置）やそれに施す化粧は人それぞれ異なっており、個人の持つ特徴（<個性>）を顕著に示す。これにより、<容貌>（顔の構造的側面）はメトニミーによって<個性>へと拡張する。以下がその例である。

- (5) 顔のない生徒が立ち上がり、同じ言葉を告げて、また座る——それが規則正しい波のように、順番に教室の前から後ろ、後ろから前へと連なっていく。（<http://www.qbooks.jp/1000/36/21.html>）
- (6) 沿線で最も顔のない江田駅を顔のある町にしたい。（田中・ケキゼ2005）

(5)の下線部は人と同じ言葉を繰り返す<個性>のない生徒を表している。ある人物の<容貌>は、その人物のものの考え方や、それを反映する言動、服装などと並んで、その人物の特徴を示す<個性>の一部である。従ってこの例では、<容貌>（部分）を表す形式（「顔」）によって<個性>（全体）の意味を表しており、部分全体関係に基づくメトニミーによる意味の拡張が認められる。また、(5)の「顔」は<人の個性>を表しているが、(6)の「顔」はモノ（「江田駅」）の<個性>を表している。この場合、<個性>の属する領域が<人間>から<モノ>へと変化している。従って、この例の「顔」は<人の個性>から<モノの個性>へとメタファーによって拡張していると考えられる。

2. 2. 3 <（人・モノの性質）注目すべき一側面>

2. 2. 2で述べたように、<顔>の構造は人それぞれ異なり、個人の持つ特徴を顕著に表すため、それがメトニミーによって<個性>へと意味拡張する。<個性>とは、個人に具わる特有の性格・性質である。そして、個人は複数の性質を持つ場合があり、そのうちの<注目すべき一側面>を表す際に、「顔」が用いられる。

- (7) 女性下着メーカーに勤めるサラリーマンと関東最大の暴力団・新選組の総長の二つの顔を持つ主人公。
（http://www.tsutaya.co.jp/item/movie/view_v_zhtml?pdid=10002830）
- (8) 何にでも挑戦し、その突撃ルポを毒舌に満ちたマンガにしてきた無頼派の一面と、幼い頃や学生時代の思い出、体験をもとに抒情豊かにマンガにする二つの顔を持つ西原大先生が、…（略）。
（<http://www.bk1.co.jp/product/02399597>）

- (9) 経済学とは、なかなか掴み所のない学問である。その最大の理由は、経済学が二つの顔を持つところにあるのかもしれない。「分析対象」としての顔と「分析方法」としての顔である。

(<http://obata.misc.hit-u.ac.jp/~itoh/iron.html>)

(7-9) はすべて、「二つの顔を持つ」の例である。個性の<注目すべき一側面>には、(7)、(8)の波線部のようにその人物の職業や性格が考えられ、これらの注目すべき側面が、身体において注目される<顔>によって表される。さらに、<個性>が<人の個性>から<モノの個性>へとメタファーによって拡張するのと平行して、(9)のように、個性を表す<人の一側面>から<モノの一側面>へとメタファーによって意味が拡張する。もちろんその場合でも、「経済学」といった対象となるモノの複数の性質のうちの、波線部の示す<注目すべき一側面>が、身体において際立ちを持つ「顔」によって表されている。

2. 3 機能的側面に基づく意味拡張

2. 3. 1 <表情>

人間は何らかの感情を抱くと、身体の外部にある顔面に備わる目、口、鼻、眉、そして顔面の筋肉を変化させる。つまり<顔>は外的なものであり、内的心情を外界に表すという機能を持つ。以下の例は文字通りには<顔>の筋肉運動を表すが、これらの筋肉運動は内的心情と同時に、あるいは内的心情に後続して生じるものである。

- (10) 顔が緩む／顔をほころばせる
 (11) 顔が引き曇る

(10)では、句全体の文字通りの意味は顔面の筋肉運動（顔面筋の弛緩）を表すが、それによって内的心情である<安堵する>こと、<喜ぶ>ことを表し、同様に(11)では、顔の筋肉運動（顔面筋の硬直）によって、その筋肉運動を引き起こす<嫌悪を感じる>ことを表している。人間は、安堵や喜びなどの精神状態にあるとき、それに伴う身体上の変化として顔面筋が弛緩し、反対に、緊張、不安、嫌悪などの精神状態にあるときには顔面筋は硬直する。これらの例では、人間の内部で生じる精神状態と、身体上の変化が同時に生じており、この時間的隣接性に基づくメトニミーによって、視覚的に捉えることのできない精神状態を、視覚的に捉えやすい身体上の変化を表す形式を用いて表している。

さらに、以下の例を見てみよう。(12)の「顔」は、(10)、(11)のような「顔」を合

む句全体での意味拡張とは異なり、構成要素「顔」の意味がそれ自体で拡張しており、全て「表情」への言い換えが可能である。

- (12) a. {浮かぬ／怪訝な} 顔をする／顔が曇る／顔が変わる
 b. {そ知らぬ／何食わぬ／(心とは裏腹に) 悲しい} 顔をする

有菌(2006)は、慣用表現を構成する身体部位詞は、その身体部位を用いて行う典型行為(その身体部位の持つ典型機能)を中心に、<行為>のフレームに基づくメトニミーによって意味が拡張していると論じている。⁵ <行為>の概念は、それに用いられる道具、その道具を用いる行為者、その行為を行う際に要求される技術や能力、その行為を行う方法、その行為によって生じる生産物などの諸要素を含む、<行為>のフレームを形成している。そして、我々が何らかの行為を行う際、身体部位が様々な行為の道具として機能するため、<道具>としての身体部位を表す形式で、行為のフレーム内の他の要素を表すことができる。例えば、<口>の典型行為の一つとして<発話行為>が考えられるが、「口が悪い」の「口」は、その発話行為を行う際の方法(<話し方>)を表し、「口を合わせる」の「口」は、発話行為の結果生じる生産物(<意見>)を表している。(12)の「顔」もこれと同様、その典型機能である<感情表出>のフレームを設定することができる。<顔>は内的心情を外部へ表出する道具であり、<感情表出>フレームに基づくメトニミーによって、道具を表す形式「顔」で、感情表出という機能の結果生じる生産物(<表情>)を表している。

また、「顔」自体が<表情>を表す例では、(12a)のように種々の感情が無意識に<表情>として表れてしまう場合と、(12b)のようにそれらを意識的に表す場合があり、後者の場合、<何も知らないような表情>をして本心を偽ったり、本心とは別の感情を装ったりする際に用いられる。外部にある<顔>は<表情>として内的心情を表すが、内的心情と外部に向けられた<表情>は必ずしも同じ方向性を持っているわけではない。人は相手の表情を、思考や感情を認識するための拠り所とする。上述のように嬉しいと感じれば顔(<身体部位>)を弛緩させるため、他者はその「緩んだ顔(<表情>)」によって相手の感情を認識する。しかし(12b)のように表情を装うことによって内的心情を装うこともでき、それによって<顔>は内的心情とは切り離された<表情>を表すことができる。これは<顔>の、表情によって心情を装うという、機能的側面における内的心情と外的な表情との食い違いから生じるものである。

さらに、顔の機能的側面に基づく意味拡張に関して、顔面筋の運動だけでなく、生理反応による感情表出に動機付けられた意味の拡張がある。

- (13) 彼の言葉に、彼女は 顔を染めた／顔を赤らめた。

(13)では、句全体の文字通りの意味は、体内における血液の上昇・循環に伴って顔面の皮膚が赤くなることを表している。この句全体の文字通りの意味は、その生理反応を生じさせる内的心情（ここでは<恥ずかしい>という感情）と同時に生じる。従ってこれらの例も、内的心情を外界に表すという<顔>の機能的側面からメトニミーによって成立している。

2. 4 位置的側面に基づく意味拡張

2. 4. 1 <人>

容貌を判断したり表情によって内的心情を認識したりする上で、身体の上方の前面に位置する<顔>は、身体において非常に顕著であり、その人物自体(<人>)を表すことができる。これは、部分によって全体を表すメトニミーに基づいて拡張した意味であり、以下の(14)、(15)がその例である。

- (14) 同窓会では、十年ぶりに顔が揃うのを楽しみにしています。
 (15) 講義では各界の第一線で活躍する豪華な教員陣が顔を並べています。

ただし、(14)の「顔が揃う」の「顔」が、部分全体関係に基づいて<人>を表し、その<人>は特定の人物に制限されない一方で、(15)の「顔を並べ(る)」は、<主要なメンバーが列席する>ことを表しており、「顔」は単に部分全体関係(位置的側面)に基づいて<人>を表すだけではない。繰り返し述べるように、<顔>は他者を認識する際に主要な箇所であるため、その身体的重要性和社会的重要性との類似性に基づくメタファーによって<主要な(重要な)人>を表している(2. 5. 1で後述)。また、以下の例にも部分全体関係以外の動機付けが見られる。

- (16) 捜査の末、ようやく顔が割れる。

(16)の「顔が割れる」は本来、犯罪捜査などで顔写真によって犯人が誰であるかが判明することを表す。この時、「顔」は単に構造的側面である<容貌>を表し、「割れる」が<判明する>を表していて、慣用的意味が表す<人物が特定される>ことと、文字通りの意味が表す<容貌が判明する>ことが時間軸上同時に生じており、従って、メトニミーによって慣用的意味が成立している。しか

し、(16)の「割れる」はその名詞句に顔の所有者である<(ある種の)人>をとることもでき(「捜査の末、ようやく犯人が割れる」)、人物特定の判断材料として顕著なく顔>の所有者である<人>を、部分全体関係に基づき表しているとも考えられる。

2. 4. 2 <対面>

「顔」を含む表現は、顔の位置的側面から、<対面>の意味を持つ。

(17) 彼とは何度か顔を合わせているが、話をしたことは一度もない。

(17)の「顔を合わせ(る)」では、<(人と)会う>という慣用的意味が表す行為が、<(二人以上の人間が)お互いの顔が向き合うようにする>という、句全体の文字通りの意味が表す行為と同時に生じる。つまり、文字通りの意味が表す行為と慣用的意味の表す行為が時間軸上隣接しており、メトニミーによって慣用的意味が成立している。

さらに、<対面>の概念に関連して、以下の例を見てみよう。

(18) このままでは彼に {顔向けできない／合わせる顔がない}。

<顔>は、前方を向く身体の一部という位置的側面から<対面>の概念を持つ(例(17))。(18)はこの<対面>とは逆方向を示している。人は、<恥>という好ましくない感情を抱くと、相手に自分の顔を向ける(見せる)ことができないという事態に陥る。つまりこれらの例では、慣用的意味が表す<恥ずかしいと感じる>ことが原因で、文字通りの意味が表す<自分の顔を相手に向ける(見せる)ことができない>という結果が生じており、二つの事態が時間的に隣接している。それにより、後者の意味を表す形式で前者の意味を表すメトニミーによって、句全体で<恥ずかしいと感じる>ことを表している。

2. 4. 3 <関係>、<人脈>

「顔」は「顔を合わせる」などの表現の句全体での意味拡張によって<対面>の概念に関わるが、<対面>することは、相手との<関係>(人脈)を築くことへと発展する。言い換えれば、<関係を築く>ことは<対面する>ことの後に生じるため、両者は時間的隣接関係にある。

(19) 顔見知り／顔馴染み

- ⑳ 私にとって彼らは、これからの人生において顔をつなぐ必要性がない人達です。
- ㉑ 彼女は顔が広いので、どこへ行っても挨拶される。

(19)では、「顔」自体が<関係>の意味を担っているのではなく、<お互いに顔を見知っている間柄>や<お互いの顔に馴染んでいる間柄>といった、複合語全体の文字通りの意味が表す状態が、お互いの<関係>をメトニミーによって表している。そして、㉑の「顔をつなぐ」では前出の表現の存在に支えられて「顔」自体が<関係>の意味を担(い、「つなぐ」が<保つ>の意味を担)っていると考えられる。同様に、㉑の「顔が広い」でも、「顔」が<関係>の意味を担(い、「広い」が<及ぶ範囲が大きいさま>の意味を担)っている。これらは、前述の行為のフレームにおける意味拡張で触れたように、対面することによって<何らかの関係を築く>という行為の結果生じた生産物である<関係>を、その行為に関わる身体部位である<顔>を表す形式によって表していると考えられる。つまり、「顔見知り」などにおける、対面して<お互いに見知っている>ことから、それと時間軸上連続して生じる<何らかの関係を築く>ことへのメトニミーによる意味拡張を基に、そこからさらに、その行為によって生じる生産物(<何らかの関係>)へとメトニミーによって意味が拡張し、「顔」自体が<関係>の意味を担うのである。⁶ ただし、同じく「顔」を含む表現が<関係>の概念に関わる以下の㉒では、意味の拡張の仕方は㉑と異なる。

- ㉒ a. 彼は経済界でも顔が利く。
- b. 彼は経済界では顔が売れている。

㉒では、句全体の意味としては<関係が広い>ことを表すが、これらの「顔」は、例㉑、㉑の「顔」が表す<関係>の意味を表しているのではない。(22a)の「顔」はその構造的側面を表しているに過ぎず、「利く」は<有効に働く>ことを表しており、句全体で<顔が有効に働く>ことを表している。また、(22b)の「顔が売れている」の「顔」は、2. 4. 1で述べた部分全体関係に基づいて顔の所有者である<人>を、「売れている」は<広く知れ渡っている>ことを表し、句全体では<人物が広く知れ渡っている>ことを表している。これらの句全体の意味が表す事態は、慣用的意味が表す<顔が有効に働く>ことや<人物が広く知れ渡っている>ことと同時に生じており、前者を表す形式で後者を表すメトニミーによって慣用的意味が成立している。

2. 5 構造的側面と機能的側面に基づく意味拡張

2. 5. 1 <代表> -<指標>、<看板>-

「顔を見れば、どんなことを考えているか、どんな人生を歩んできたかがある程度分かる」ように、「顔」の容貌（構造的側面）や表情（機能的側面）は相手の内的心情や人格、個性を認識する際に重要な役割を果たす。この認識の主要部分として身体において重要な<顔>は、社会において重要な<代表>へとメタファーによって意味が拡張する。

(23) 首相は国の顔として、毅然とした態度をとらなければならない。

<顔>は人体において最も目立つ部分であるから、<代表>の概念を表す時、その背後に必ず<顔>に対する<からだ>のような、部分によって代表される背景の存在が含意される。Langacker (1993) は、身体部位詞はその定義に必要なより大きい身体部位をベースとしており、その中でその身体部位詞の表す部分がプロファイルされると述べている。「顔」が<代表>としてプロファイルされる場合も、そのベースとなる何らかの<グループ>が背景にある。(23)ではその背景部分（身体）は「国」がメトニミーによって表す<国民>であり、代表となる部分（顔）が<首相>である。さらに、身体における重要性と社会的重要性の類似性に基づくメタファーによって<顔>から拡張した<代表>の意味は、田中・ケキゼ (2005: 105-106) が示すような<看板>と<指標>の意味に細分化され得る（例は田中・ケキゼ (2005: 106) より引用）。

(24) その会社の「お客様相談室」や「サービスセンター」の対応を見れば、その会社がどのような会社であるのかよく分かる、と言っても過言ではない。私たちにとってはまさにその会社を代表する顔なのである。

(25) 広島「顔」になる名所・名物の紹介ページ。

田中・ケキゼ (2005: 106) はこれらの例に対し、「ある存在物を代表する部分の概念を表すのは意外ではない。代表的な部分という場合、全体のうちの特に良い面を示す<看板>としてのケースと、全体を評価するためのサンプルあるいは<指標>としてのケースがある。」と述べている。同論文はこれについてそれ以上述べていないが、細分化される理由を次のように考えることができる。(24)では、直接客と接する「お客様相談室」や「サービスセンター」が、客にとっては会社という全体の中で最も際立ちの大きい部分であり、<指標>となる。また(25)では、「名所・名物」という人々の興味を引くものに対して「顔」を用い

ており、これは広島の<看板>である。我々は、あるグループの中で最も際立つものを認識するとそれに興味を持ち、また、興味を持ったものにさらに際立ちを与える。この、<背景部分全体において最も際立ちのあるもの>という側面を表すのは<指標>であり、一方<人々の興味をひきつけるもの>という側面を表すのが<看板>なのである。また、<代表>として<興味をひきつけるもの>は通常は積極的評価がなされる場合が多く、田中・ケキゼの述べる「良い面を示す」という<看板>の特徴も、これにより説明できる。

2. 5. 2 <名誉>

前節で述べたように、その構造と機能の両側面から、身体において特に重要な部位である<顔>は、その身体的重要性和社会的重要性和の類似性から<代表>の概念を持つようになる。身体において重要な役割を果たし、また、それゆえある集団において<代表>とされる「顔」を、以下の例②6)にあるように泥を塗るなどして汚すことは、その<顔>を所有する人への侮辱行為である。

②6) 顔に泥を塗る／顔を汚す

この、慣用的意味が表す<名誉を傷つける>という侮辱行為は、句全体の文字通りの意味が表す<（相手の）顔を（泥を塗るなどして）汚す>という侮辱行為との類似性に基づくメタファーによって成立する。同様に相手の名誉を傷つける表現に「顔を潰す」があり、文字通りには殴るなどして<顔を傷付け変形させる>ことを表すが、これは、<顔を汚す>ことによる侮辱行為よりも名誉の損傷の程度が甚だしい場合に用いられる。また、これらの表現の存在によって、以下の例のように「顔」自体が<名誉>の意味を持つようになる。

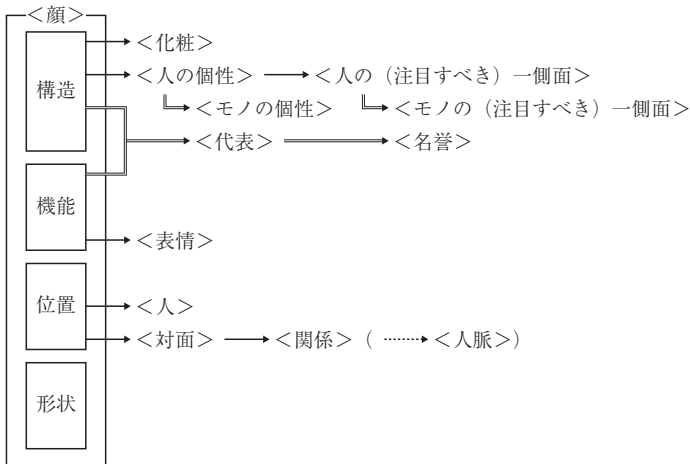
②7) 親の顔を立てるため_に出席した。

②7)では、「顔」が<名誉>を、「立てる」が<損なわれないように保たせる>をそれぞれ意味している。

3. おわりに

本稿では、「顔」を構成要素に含む表現に対して、<顔>の意味拡張の仕組みを考察し、種々の概念間の関係について明らかにした。身体部位<顔>は、目

や口などの部位により成り立っており（構造的側面）、内的感情を外部へ表出し（機能的側面）、身体全体において前方を向いた一部であり（位置的側面）、平面的である（形状的側面）という四つの側面から特徴付けられる。〈顔〉を表す語の持つ種々の概念は、これらの側面のうち形状的側面以外のいずれかの側面、または複数の側面に基づいて意味が拡張し、その拡張した概念はさらに別の概念へと拡張する。⁷ こうして〈顔〉から拡張した種々の概念は、お互いが独立して拡張しているのではなく、複数の概念間に関連性が認められ、下図のような意味のネットワークを形成している（実線はメトニミー、二重線はメタファー、点線はシネクドキーによる拡張をそれぞれ表し、矢印の方向は拡張の方向を表す）。



本稿で繰り返し述べてきたように、顔は他者を認識したり自分の内的心情を外界に表したりする際に身体において最も際立っている。このように意味が多岐にわたり拡張するのは、他ならぬ身体における〈顔〉の重要性によるものであろう。

注

- 1 詳しい議論は、有菌（2005）を参照のこと。
- 2 本稿では、語や句などの表現は「…」で示し、意味や概念はく…>で示す。
- 3 「顔」の認知的考察には他にUkosakul（2003）があり、彼女が挙げるタイ語の *naa*（「顔」）が表す諸概念には、本稿で挙げる諸概念と重なるものが多く、

- またその拡張のプロセスも類似している。身体に対する同様の概念化が異言語間で見られることは興味深く、これについては稿を改めて論じたい。
- 4 日本語とタイ語の〈顔〉の対照研究を行ったサイソンプーン (2005) でも、〈顔〉の特徴として(1)の四つを挙げているが、それぞれに関する記述は本稿とは異なる。
 - 5 ある語は、経験、習慣、認識を背景として理解される。この、語に対するひとまとまりの背景的知識をフレームと言う (Fillmore 1982)。また西村 (2002) は、フレーム内における焦点移動という、百科辞典的知識を操作する能力をメトニミーの基盤とし、(広義の)メトニミーを、「ある言語表現の複数の用法が、単一の共有フレームを喚起しつつ、そのフレーム内の互いに異なる局面ないし段階を焦点化する現象」と定義している (西村 2002 : 299)。
 - 6 ②の「顔」には、より限定的なく人脈〉の意味を認めることもできる。この場合、〈関係〉が「あるものが他のものと持つ何らかのつながり」であるのに対し、〈人脈〉は「何らかの関係を持った人と人とのつながり」であり、この〈関係〉に対する〈人脈〉の限定的意味は、シネクドキーによって得られるものと考えられる。
 - 7 〈顔〉の形状的側面に基づき拡張した意味は「顔」にはない。これに対し、松本 (2000 : 322) の身体部位詞から物体部分詞への意味拡張に関する研究によると、「おも (て)」は〈顔〉の形状的・位置的側面から拡張した〈人が向き合う側の二次元的表面〉を表し (「コインのおもて」)、一方「めん」は、形状的側面のみから拡張した〈二次元的表面〉を表す (「路面」)。本来は〈顔〉を表す「めん」、「おもて」は、同様に〈顔〉から拡張した意味であっても、「顔」が表さない形状的側面に基づく物体部分詞としての意味を担っている。

参考文献

- Fillmore, C. J. 1982. Frame Semantics. In *The Linguistic Society of Korea (ed.), Linguistics in the Morning Calm*. Seoul: Hanshin Publishing Co. pp. 111-138.
- Kövecses, Z. and G., Radden. 1998. Metonymy: Developing a cognitive linguistic view, *Cognitive Linguistics* 9-1 : 37-77.
- Kövecses, Z. and P., Szabó. 1996. Idioms: A view from cognitive semantics. *Applied*

Linguistics 17: 326-355.

- Langacker, Ronald W. 1993. Langacker, Ronald W. 1993. Reference-point Constructions. *Cognitive Linguistics* 4 : 1-38.
- Ning, Yu. 2003. The bodily dimension of meaning in Chinese: what do we do and mean with “hands”? In Eugene Casad & Gary Palmer, (eds.), *Cognitive Linguistics and non-Indo-European Languages*. Berlin: Mouton.
- Ukosakul, Margaret. 2003. Conceptual metaphors motivating the use of Thai ‘face’. In Eugene H. Casad, and Gary B. Palmer (eds.), *Cognitive Linguistics and Non-Indo-European Languages*. Berlin/New York: Mouton de Gruyter. pp. 275-304.
- 秋元実治. 1994. 「イディオムのタイポロジー的研究—日・英・仏・独語を中心に—」, 青山学院大学総合研究所人文学系研究センター研究叢書, 1—30.
- 有菌智美. 2005. 「身体部位詞（「手」, 「口」）を含む慣用表現の意味分類」, 『日本認知言語学会論文集 第5巻』, pp. 487—498.
- . 2006. 「分解可能な慣用表現における身体部位詞の意味拡張」, 『日本認知言語学会論文集 第6巻』, pp. 1—11.
- サイソンプーン, ラダポーン. 2005. 「「顔」に関する言語表現の意味拡張」, 『日本認知言語学会第6回大会CONFERENCE HANDBOOK』, pp. 10—13. (口頭発表)
- 田中聡子. 2001. 「「目」の多義分析—フレームと比喩複合—」, 『言葉と文化』, 名古屋大学国際言語文化研究科, 2 : 61—78.
- . 2002. 「「口」の慣用表現—メタファーとメトニミーの相互作用—」, 『言葉と文化』, 名古屋大学国際言語文化研究科, 3 : 5—20.
- 田中聡子, ケキゼ・タチアナ. 2005. 「「顔」と«ЛИЦО»—<顔>概念の日露対照研究—」, 『世界の日本語教育』, 15 : 103—116.
- 西村義樹. 2002. 「換喩と文法現象」, 西村義樹 (編), 『シリーズ言語科学2 認知言語学 I : 事象構造』, 東京大学出版会, pp. 285—311.
- 橋本邦彦. 1999. 「「目」のメタファー—日本語とモンゴル語の対照研究—」, 『表現研究』, 69 : 52—60.
- 松本曜. 2000. 「日本語における身体部位詞から物体部分詞への比喩的拡張—その性質と制約—」, 坂原茂 (編), 『認知言語学の発展』, ひつじ書房, pp. 317—346.
- . 2004. 「日本語の視覚動詞における虚構移動」, 『日本語文法』, 4—1 : 111—128

初山洋介, 深田智. 2003. 「第三章 意味の拡張」, 松本曜 (編), 『認知意味論』
(シリーズ認知言語学入門), 大修館書店, pp. 73-134.

用例採集

本稿での例は, 作例と, 検索エンジン google (<http://www.google.co.jp/>) によって検索したものである. (2006年6月1日~2006年6月10日)

